（4）自分に正直に

これら文章をつくるに当たって、もっとも大切なことは、自分が思ったとおり、表現することである。

ここで気取ったり、ええ格好するなど、一切不要。

これがいい文章を作っていく、原点である。

たとえば初めの文章の中には、次のようなものがあった。

「お父さん、遊んでくれるとうれしいな」

これはあきらかに、いつも一緒に遊んでくれない父親への甘えとともに、批判も込められている。

お父さんが忙しいのはわかるが、でもたまには遊んでくれてもいいのではないか、と訴えている。

このように、父親を肯定したうえで、願望も加える。これでこの一文は一段と、深みと奥行きを増してくる。

これも、思ったとおり正直に書いたからである。こんなことをお父さんに言ってはいけない。そこまで言うと叱られてしまう、などと考えることはない。

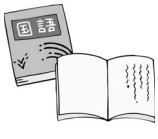
自分に正直に書くことによって、五・七・五の短い文章が引き立ち、そしてそれが、読む人の心を惹きつけるのである。

一日目の授業はここまでだが、改めて私が強調したことは、「自分の気持ちに正直に書く」ということ。これができるようになると、もはや作家としての第一歩を踏み出したも同然。

「とてもいいから、その調子で、どんどん書いてごらん」というと、みんな自信ありげ。

そこで翌日までに、自分の家や両親、家族などについて、もう少し長めの文章を書いてくるよう、宿題を出すことにした。

ここで渡辺さんの第一日目の授業は終わっている。短文から始める。思ったことを正直に書くということでした。



張江 幸男 （はりえ ゆきお）

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問

前全日本空輸（株）海外子女教育相談室長、元三菱商事（株）相談室長、元ニューヨーク日本人学校校長、元台北日本人学校教頭

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA

〒 145-0064 東京都大田区上池台 3-39-9

TEL：03-5754-2240 FAX:03-5754-2241

HP：www.jolnet.com

【3】わたしも正直に書いてみました

先週、北海道に飛んだ。母校（岩見沢東高）を卒業して60年の同期会が、札幌で開かれた。51名の参加で、車椅子での参加者も3名いた。禿げたり、白髪だったり、外見ではあれっという友もいたが、話している間に、紅顔の美少年が甦ってくる。不思議なことに、いろいろな場面も浮かび上がってくる。大感激の2時間だった。

一番の親友だった一条君が、療養中で不参加だった。翌日、彼を見舞うことにした。

札幌駅の4番フォーム。2、3人の列に並んだ。通りかかった駅員に、指定券を買うところを聞いた。車内でも買えますよ。でも、この列車は自由席でも100%かけられますよ。私は丁寧にお礼を言い、喜んで自由席に向かった。

列車の中でたべようと、売店でおにぎり2個とお茶1本を買おうとした。合計520円ということで、すぐに払った．ところが担当のおばさん、お茶の取り出しに時間がかかる。そこへ列車が入ってきた。「急いでください」と、少しきつい言葉で言った。「はい、すみませんね」と言って袋を渡した。中にはおにぎり2個とお茶が2本入っていた。

「お茶は1本ですよ」と言いながら、1本を商品台に置き急いで列車に乗った。窓際の席に落ち着き、おにぎりを食べようとした時、売店のおばさんが飛び乗ってきて、「1本分多くいただいていました」120円を私の手に握らせ、動き出した列車から飛びおりていった。

親友を見舞った。彼も教職歴が長かったので、共感する話も多くあっという間に帰る時間になった。タクシーを呼ぶとすぐにきたが、写真をとったり、別れの言葉を交わして数分待たせてしまった。

乗り込んでから「待たせてしまいましたね、ご免なさい」謝ると、すぐに「なあーんも、なんも」とのんびりとした語調で答えた。忘れていた故郷の方言「なんも」は「どう致しまして」という意味だが、親しみがあって、相手をねぎらう気持ちがこもっている。車内には何とも言えない柔らかい空気で、いっぱいになった。

海外の日本の子ども達は、日本語での作文が苦手のようです。我家の子どもは「漢字や日本語での言葉を知らない」「日本語での文章の書き方を知らない」とこぼしていました。

アメリカの教育を受けた子どもは「自分の考えを書く」のは得意でも、「自分の思いを書く」のが苦手なようです。

現地校で「HAIKU」を学んだチャンスを生かして、ここで紹介されたように「5・7・5」の短文からスタートしてみてはいかがでしょう。